

岩手県における磨製石斧の製作工程について

村木 敬

筆者はかつて岩手県沿岸北部地域に所在する縄文時代の遺跡から出土した磨製石斧の整理を通じて、従来と異なる簡略化された製作工程が存在することを確認した（（公財）岩手県文化振興事業団2019・2021b）。拙稿（2021）では、簡略化された製作工程の復元を試み、両工程を対比させることでその一端を明らかにした。本稿ではさらに岩手県全域にその範囲を広げ、縄文期における磨製石斧の製作工程の実態を明らかにしていく。

1. はじめに

筆者は岩手県沿岸北部地域に所在する縄文時代の遺跡の整理を通じて、磨製石斧製作において簡略化された工程が存在することを確認した（（公財）岩手県文化振興事業団2019・2021b）。従来から提示されている製作工程（阿部1987・2001、鈴木1993、須原2013）とは異なるものであり、拙稿（2021）では両工程を対比することにより簡略化された工程の復元を試みた。その結果、製作工程は、石材によって選択する構造が成立しており、製作者の意図が反映される柔軟性を有するものと評価された。また、それは縄文時代早期から後期にかけて通時的に存在していたとの結論に至っている。このように、縄文時代における岩手県では、磨製石斧の製作工程が複数存在していることが明らかとなった。本稿では岩手県全域に範囲を広げ、縄文期の磨製石斧製作工程の実態を把握していきたい。

2. 製作工程の区分と対比

（1）製作工程の区分

従来から把握されている須原（2013）が提示した製作工程を工程A、筆者（2021）が提示した製作工程を工程B1・2と区分し、記述していく。なお、これらとは別に擦切技法（高橋2017）も存在しているが、資料数の少なさから本稿では言及せず、出土の有無とする確認のみに留めている。

製作工程は、「剥離・敲打・研磨」の各整形作業によって成立していることから、ここでは3種の技術区分により各製作工程を把握していく。以下、製作工程については、完成品以外の各整形段階をみていく。以前、筆者（2021）は須原の提示した成果（2013）と比較するために同様の段階区分を設定したが、今回の区分では剥離・敲打整形段階を敲打整形段階（前半）に統合した形となる。各段階における該当資料については第1図に示しておく。資料の大半は未製品として捉えられていることが多いが、形状は完成品と大きく乖離していることと、概ね欠損していることから失敗品として捉えている（阿部2000）。

（2）製作工程の対比

製作工程A

〔剥離整形〕 両面に対して剥離を施し、左右対称となるように整形される。また、これらの中には、自然面を片面もしくは両面の器体中央に残すものも含まれる。

〔敲打整形〕 剥離整形を概ね完了させた個体に対して敲打を施している。前半は側面もしくは表裏面側から整形されている。後半は全面に展開していく。

〔研磨整形〕 全面が敲打痕に覆われている個体に対して研磨を施している。ただし、稀に敲打整形の

工程が未完了の個体に対して研磨整形を施す例が確認されている。

〔石材の捉え方〕 捉え方は石材の厚薄（①・②）に関わらず、中央である芯の部分を利用している。つまり、これは規格的な整形を意図していることが特徴である。

〔製作過程〕 段階ごとに作業を完了させた後に、次段階へと移行している。稀に、未完了の個体を次段階へと移行する例も認められるが、自然面を極力除去しようと試みた痕跡が認められる。基本的には剥離整形により左右対称に整えた後、次段階へと移行させている。本製作工程は製作作者による個人的判断（見立て）を介在することが少なく、一律的な過程にあることが窺える。

製作工程B1

〔剥離整形〕 片面のみに剥離を施し、表裏面は自然面と剥離面で構成される。その結果、側面観は左右非対称に整形される。

〔敲打整形〕 片面・側面剥離に整形された個体に対して敲打を施している。前半は、片面・側面の剥離面側を中心に整形されている。後半は自然面側へと移行し、全面に展開していく。

〔研磨整形〕 全面が敲打痕に覆われている個体に対して研磨を施している。ただし、稀に敲打整形の工程が未完了の個体に対して研磨整形を施す例が確認されている。

〔石材の捉え方〕 捉え方は磨製石斧の片面に対して石材形状をそのまま利用している。つまり、これは完成形状を予め想定したうえで、素材選択が行われていることが特徴である。

〔製作過程〕 全ての作業を完了させずとも次段階へと移行していることが捉えられる。これについては、自然面を片面に残したまま敲打整形を行うこと、剥離や自然面を残したものに対しても研磨整形を行うことが該当する。基本的に、側面観は剥離整形時に形成された左右非対称のまま、次段階へと移行している。特筆すべきは、剥離整形を極力施さず自然面を大きく残しても敲打整形へと移行している点であり、その行為が剥離・敲打整形時の作業軽減を意図していることにある。本製作工程は製作作者による個人的判断（見立て）が反映されているものとみられ、柔軟な過程にあることが窺える。

この他には、剥離整形段階に類似した石器である礫搔器（力持型スクレイパー）を伴出する事例が多く認められる。これについては拙稿で述べたように、同工程の技術体系に組み込まれていたものと思われる。ただし、同器種については刃部位置により区分できることも確認している。

製作工程B2

〔剥離整形〕 側面と刃部側にのみ剥離を施し、両面に自然面を残す。

〔敲打整形〕 側面剥離に整形された個体に対して敲打を施している。該当資料は少なく判然としない。

〔研磨整形〕 全面が敲打痕に覆われている個体に対して研磨を施している。ただし、稀に敲打整形が未完了の個体に対して研磨整形を施す例が確認されている。

〔石材の捉え方〕 捉え方は磨製石斧の両面に対して石材形状をそのまま利用している。特徴は工程B1と類似するものの、整形度合いの少なさから、その形状によってさらに制限されていることである。

〔製作過程〕 製作工程B1と同様、全ての作業を完了させずとも次段階へと移行していることが捉えられる。本製作工程は製作作者による個人的判断（見立て）が重視されており、製作工程B1よりさらに簡略化した柔軟な過程にあることが窺える。

第1表 製作工程の比較

	製作工程A	製作工程B1	製作工程B2
剥離整形	両面剥離 左右対称に整形	片面剥離：片面に自然面を残す 左右非対称に整形	側面と刃部剥離：両面に自然面を残す 概ね左右対称
敲打整形-前	側面か表裏面から整形	片面・側面剥離から整形	側面から整形
敲打整形-後	全面に展開	全面に展開	全面に展開
研磨整形	全面に覆われた敲打に 対して整形	全面に覆われた敲打に対して整 形、一部敲打が完了しない個体 にも研磨整形	全面に覆われた敲打に対して整 形一部敲打が完了しない個体にも研 磨整形
捉え方	原石の中央	原石を片側に寄せる	原石の中央
過程	段階ごとに完了させた のち、次段階へ 個人的な判断が少ない	全ての作業を完了させずとも次 段階へ 個人的な見立てが反映	全ての作業を完了せずとも次段階へ 個人的な見立てが重視

(3) 小結

上記のように各製作工程をまとめてみたが、製作工程Aと製作工程B1・2との間には同異点が捉えられる（第1表）。

共通点：敲打整形段階は剥離面側から作業が進行し、最終的に全面に施される。そして、それらに對して研磨整形が施される。

相違点：剥離整形段階における完成形状である。それに伴い、敲打整形段階の前半において整形過程に差が生じている。さらに、石材の捉え方（第2図）と製作に対する個人的判断が介在する度合いにも差異が認められる（註1）。

擦切技法：確認できる遺跡は早期の外屋敷XIX遺跡、前期から中期の力持遺跡と少なく、その様相については判然としない。

3. 分布と変遷

上記のように県内では敲打を伴う3種類の製作工程と擦切技法の存在を確認している。ここではそれらの分布と変遷を把握していく。

分布は第3図に示したように、製作工程Aが内陸、製作工程B1が沿岸北部地域を中心として広範囲に認められており、二極化にあることが窺える。ただし、この点について若干補足しておくと、製作工程B1は岩手県だけでなく青森県や宮城県の太平洋沿岸地域においても確認しており、広範囲に存在する一般的な様相にあるものと捉えられている（青森県教育委員会2011、石巻市教育委員会2018）。また、製作工程Aは従来どおり全国的に確認されているものである。

時間的変遷は第2表に示したように、各製作工程が通時的に認められる。しかしながら、製作工程Aは後期以降、製作工程B1は前期から後期の間で主に利用していることが捉えられる。この点から県内では現時点において後期に石斧製作の変換期を求められそうである。ただし、製作工程Aは内陸部で製作遺跡の確認例が少ないため判然としないが、早期以前には当然成立しているものと考えられる。このことから、各製作工程は概ね当初から併存していたものと想定される。

さらに、両者を合わせてみていくと、内陸部では後期以降に製作工程A、沿岸部では前期から後期まで製作工程B1が利用されていることが窺える。この製作工程に違いが生じた要因については、洋野町の遺跡の成果から検討していく。各遺跡では通時的に大量の石斧製作が行われていることを確認している。つまり、当該地域は、産出地へ直接採取ができる石材環境にあることを意味する。この要因としては、背後に形成される北上山地から複数河川への石材の流出が豊富であるため、供給量が安

定していること、採取地の一つである海岸までの距離が短い場所であることなど、石材の獲得が容易であったと想定される。このような良好な石材環境が、柔軟な製作工程B1を成立させた可能性がある。一方、製作工程Aは石材が限定されるため、集落遺跡外による製作が多いこと、また生産遺跡数も少ないことから判然としないが、石材環境と社会背景の変容が工程を選択させた要因となることが想定される（阿部2001）。

4. まとめ

以上、岩手県における磨製石斧の製作工程について概観した結果、敲打を伴う技法には、3種類の製作工程が内包されていることが明らかとなった。そして、それらは縄文時代早期から後期にかけて存続し、内陸部と沿岸部で二極化した分布を形成することが捉えられた。その要因としては石材の供給量が製作工程選択の背景に存在することを想定した。最後に県内の様相について特筆すべき点をまとめておく。

早期は遺跡数も少なく判然としないが、前期には製作工程A・B1・B2、擦切技法の全てが揃っている。内陸部ではその様相が不明であるが、沿岸北部では製作工程B1を主体とし、大量に磨製石斧の製作が行われている。後者における遺跡数及び石器の出土量を考えると、当該地域は一大生産地を形成していたものと思われる。この増加の要因は集落の増加に伴い木材需要の高まりを反映した結果と考えられる。そして、中期には県内において遺跡数が増加傾向にあるものの、製作工程については判然とせず不明な点が多い。さらに、後期は内陸と沿岸部地域で異なる製作工程が選択される。内陸部では專業的な体制が図られ、交換システム（阿部2001）の形成及び確立が示唆されている（須原2013）。それ以降、この体制が維持され、弥生時代にも継承されたものと考えられる。一方、沿岸部地域では、遺跡数が大幅に減少するため、晩期以降の様相については判然しない。

このような環境下において、県内の磨製石斧製作は縄文時代前期と後期に変換点が想定される。それは社会システムの変化などの要因が関係しているものと考えられるが、今後、その他の要素と複合的に検討して捉えていく必要がある。

本稿の執筆にあたり下記の方にお世話になりました。末筆ながら感謝申し上げます。

北村忠昭、須原 拓、村上 拓、村田 淳

註

1 これらが生じた要因の一つに、沿岸北部地域では石材の石質や環境などが想定されている（（公財）岩手県文化振興事業団2021b）。それは、洋野町に所在する北ノ沢I遺跡では石器材料によって工程が使い分けられ、工程Aは主に層状に剥離しやすいホルンフェルス、工程B1は主に細粒花崗閃緑岩などを選択している事例である。

参考文献 （下記の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第〇集は岩文埋報第〇集と略す）

青森県教育委員会 2011『道仏鹿棲遺跡 藤沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第499集

阿部朝衛 1987「磨製石斧生産の様相」『史跡 寺地遺跡』353-372頁新潟県青海町

阿部朝衛 2000「先史時代人の失敗と練習-石鎌と磨製石斧の分析から-」『考古学雑誌』第86巻第1号、1-26頁

阿部朝衛 2001「日本における磨製石斧と生産交換」『帝京史学』第16号116-130頁

石巻市教育委員会 2018『中沢遺跡』石巻市文化財調査報告書第14集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第238集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『長倉遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第336集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『小松I遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第433集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第482集

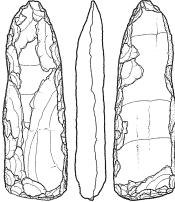
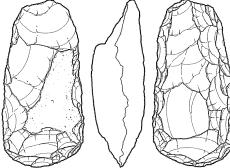
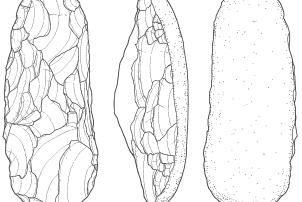
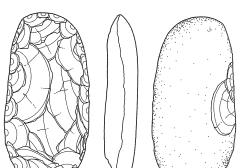
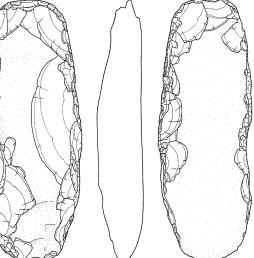
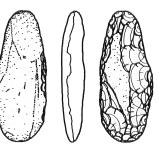
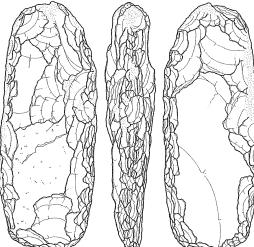
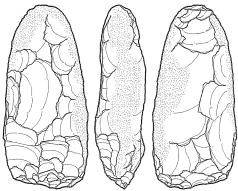
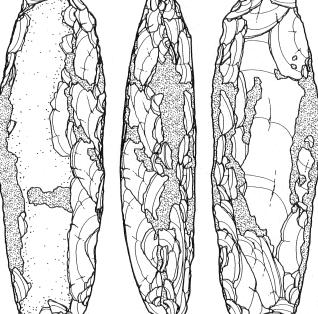
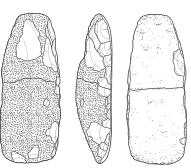
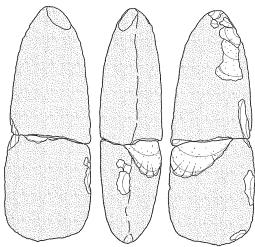
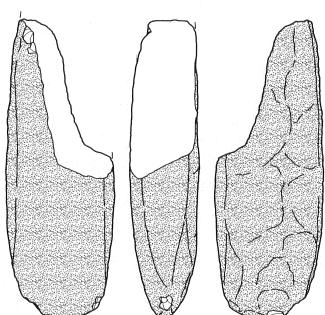
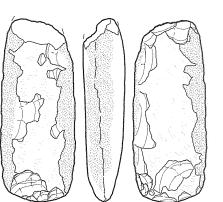
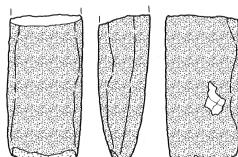
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2008『力持遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第510集

（公財）岩手県文化振興事業団 2013『川目A遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第589集

- (公財)岩手県文化振興事業団 2015 『外屋敷 X IX 遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第646集
 (公財)岩手県文化振興事業団 2017 『西平内 I 遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第673集
 (公財)岩手県文化振興事業団 2018 『北鹿糠遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第686集
 (公財)岩手県文化振興事業団 2019 『鹿糠浜 II 遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第702集
 (公財)岩手県文化振興事業団 2020a 『田ノ端 II 遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第715集
 (公財)岩手県文化振興事業団 2020b 『サンニヤ III 遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第714集
 (公財)岩手県文化振興事業団 2021a 『間木戸遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第723集
 (公財)岩手県文化振興事業団 2021b 『北ノ沢 I 遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第725集
 (公財)岩手県文化振興事業団 2021c 『宿戸遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第726集
 (公財)岩手県文化振興事業団 2021d 『鹿糠浜 I 遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第727集
 斎藤 岳 2012 「本州北東端の磨製石斧製作-三陸の石材環境への適応と石斧の製作の解明にむけて-」『研究紀要』第17号19-29頁青森県教育委員会
 鈴木道之助 1993 「磨製石斧概論」『千葉県史研究』創刊号21-39頁千葉県
 須原 拓 2013 「川目 A 遺跡出土の磨製石斧にみる石斧生産について」『紀要』 X X X II 59-68頁 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 高橋 哲 2017 「2 円筒土器文化圏における磨製石斧の考察-三内丸山遺跡と水上 (2) 遺跡出土の磨製石斧の比較を通じて-」『特別史跡 三内丸山遺跡 年報』 33-42頁20青森県教育委員会
 中島 誠 2002 「群馬県における縄文時代早期から中期初頭の打製斧形石器」『石斧の系譜-打製斧形石器の出現から終焉を追う-』 57-61頁第10回岩宿フォーラム/シンポジウム予稿集
 宮古市教育委員会 1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』
 宮古市教育委員会 1989 『千鶴遺跡 - 昭和62年度発掘調査報告書 - 』 宮古市埋蔵文化財報告書16
 村木 敬 2019 「総括 石器」『鹿糠浜 II 遺跡発掘調査報告書』 岩文埋報第702集
 村木 敬 2021 「磨製石斧製作工程について」『紀要』第40号85-94頁 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

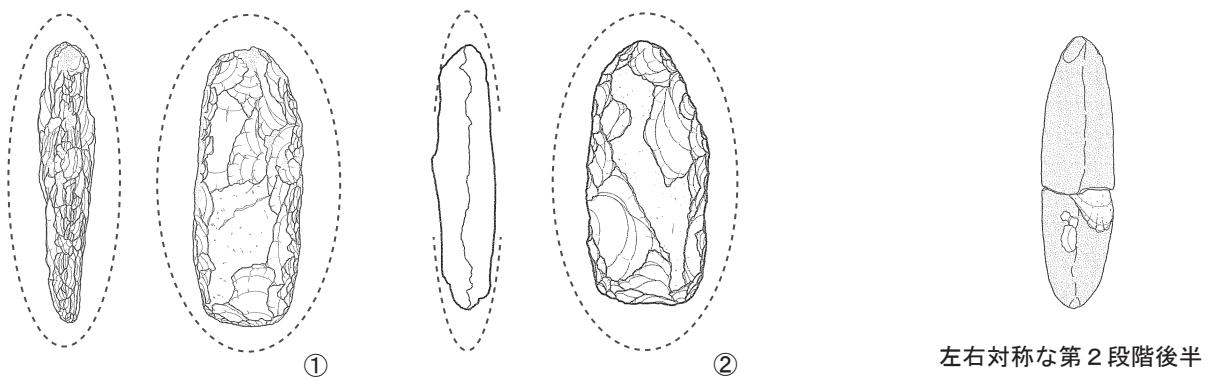
第2表 製作工程の変遷

縄文時代	内陸				沿岸			
	工程 A	工程 B1	工程 B2	擦切技法	工程 A	工程 B1	工程 B2	擦切技法
早期	■	■			■		■	■
前期	■				■		■	■
中期	■				■	■		
後期					■		■	
晩期								

	工程 A	工程 B1	工程 B2
剥離整形 段階	 	 	 
敲打整形 段階	 	 	前半
			後半
研磨整形 段階			

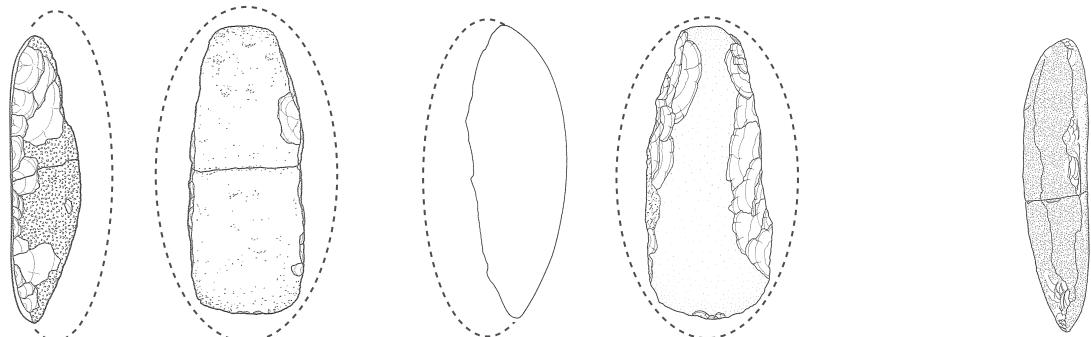
第1図 製作工程図

工程A



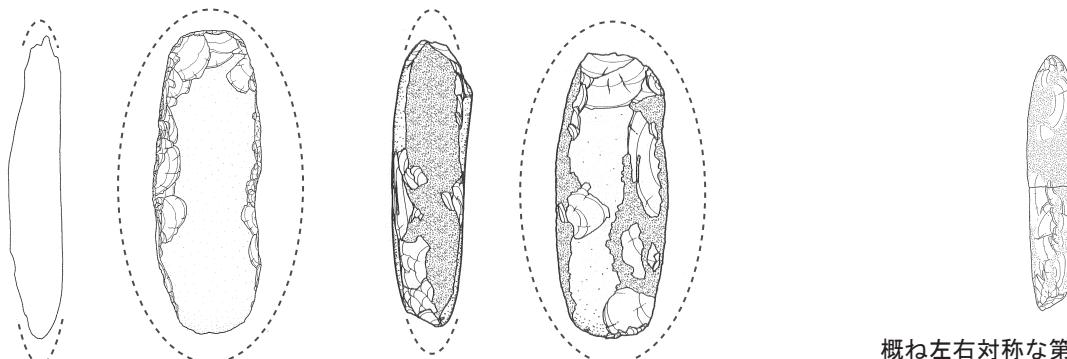
左右対称な第2段階後半

工程B1



左右非対称な第2段階後半

工程B2

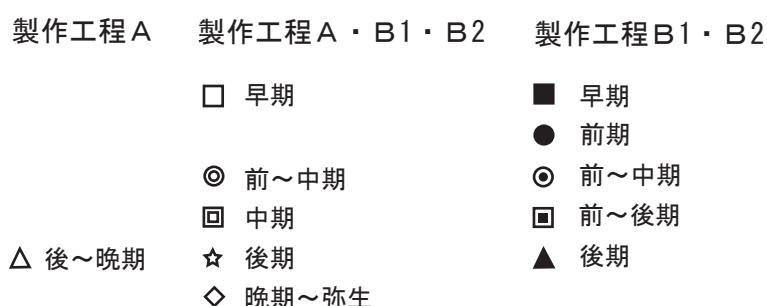
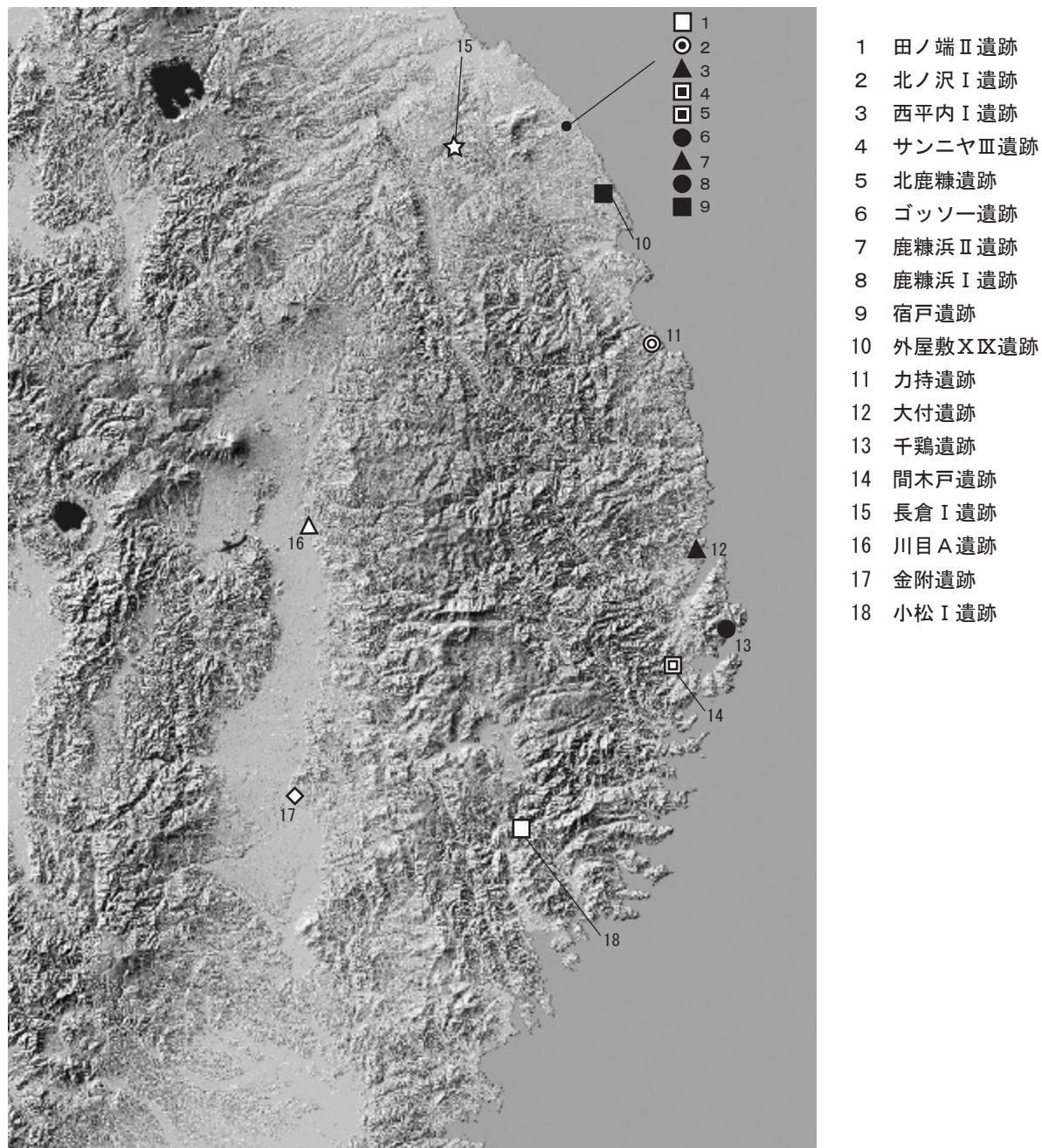


概ね左右対称な第2段階後半



原石の推定範囲

第2図 石材の捉え方



第3図 遺跡分布図